

地方分権の十年
——スプルモンデ諸島地域における新郡設立 “騒動” 覚え書き——

**A Decade of Regional Autonomy Policy: An Account of the Dawn
of Making New Subdistrict in the Spermonde Archipelago, South Sulawesi**

濱元 聡子*
Satoko HAMAMOTO

Abstract

This paper describes a breath of socio-political change in the Era of Regional Autonomy (*Otonomi Daerah*) in the Spermonde Archipelago, South Sulawesi, Indonesia. A small but steadily growing commitment of the local population towards adoption of *Otonomi Daerah* was observed through the dialogues with local people in the context of the region's historical, cultural and economical background. According to the Chronicle of Descendants of Melayu-Makassar in South Sulawesi, the first wave of the Malay and Arabic immigrants, mainly the merchants, arrived in the Spermonde Archipelago by the end of the seventeenth century at the latest. Shortly afterward, this movement spread throughout the archipelago, and the region consequently entered into the era of flourishing trade and fishery, which were carried out across the Makassar Strait and its beyond by their own initiatives. With such independent atmosphere, the people in the Spermonde Archipelago have been characterized by the lack of unity toward mainland Sulawesi in terms of social formation. Geographical distance between the archipelago and mainland Sulawesi had kept the region isolated from the mainland. Such a subtle relationship, however, began to change in accordance with the dissemination of the norm of *Otonomi Daerah* and the implementation of Regional Autonomy Policy.

I. はじめに

1. 目的

本稿では、スラウェシ島本土沖合に位置する島嶼部地域における地方分権化の浸透を、この地域の生業活動と日常生活における変容を手がかりとして明らかにすることを目的とする。スプルモンデ諸島は、インドネシア共和国の独立以来、スラウェシ島本土の地方行政に管轄されてきた。南スラウェシ州西岸の沖合い 15~40 キロメートルの海域を南北に点在する地理背景は、本土からの関心も届きにくい。まとまった政治的単位としての特徴が顕在化することはなかった。その一方で、この地域の主要な生業活動である漁業および商業活動をとおした人の移動や生業活動上の情報の共有は顕著

*京都大学東南アジア研究所； Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

な動態を呈してきた。このため、海の地域の共同体としての緩やかな連帯意識や共同体意識のようなものは存在していたように見て取れる。

本稿では隆起サンゴ礁の海域に人が住み始めるようになった 17 世紀以降のスプルモンデ諸島の歴史を確認しながら、この地域のスラウェシ本土との距離感の変遷に焦点を当てる。20 世紀から 21 世紀にかけて、インドネシア共和国が劇的に変化していく中で、スプルモンデ諸島地域が近代インドネシアの辺境において、どのような位置づけにあり、地域社会の中で役割を果たしてきたかを説明する。1990 年代からおよそ 10 年間続いた高級魚スヌ・クラブの活魚輸出ブームは、東南アジア地域を襲った通貨危機の時代にあって、スプルモンデ諸島地域が国内の多くの地域が経験していた経済的苦境とはまったく異なる経験を説明する出来事であった。この景気時代が過ぎた今、スプルモンデ諸島は、静かに緩やかな変化を経験しつつある。地方分権の地方への浸透の事例を、本稿では整理する。

2. 調査地の背景

スプルモンデ諸島 (Kepulauan Spermonde) は、南スラウェシ州西岸部に、南北約 200 キロメートルにわたって点在する隆起サンゴ礁の島嶼である。この島嶼部地域は行政上、ふたつの県と市に分かれて管轄される。全体の面積の 80% を占めるパンカジェネおよび島嶼部県 Kabupaten Pangkajene dan Kepulauan (以下、パンケップ郡と略す) は、スプルモンデ諸島の北部域にリウカン・トパビリン郡 Kecamatan Liukang Tupabbiring を配し、2004 年の統計によれば、同郡には有人島 33、無人島 9 が点在し、4,889 世帯 25,554 人が居住する¹。一方、同諸島南部域はマカッサル市によって管轄される。こちらには有人島 7、無人島 1 がウジュンタナ郡 Kecamatan Ujung Tanah 下の 3 つの行政村 Kelurahan に配され、人口は 9,000 人強を数える。この 7 つの島は、1971 年まではパンケップ県に所属する島嶼であった。これらの島嶼部では、人口の 70% が南部のバランロンボ島 Barrang Lompo とバラーンロンボ島 Balang Lompo を含めたいくつかの島に集中する²。バランロンボ Barrang Lompo 島には 1945 年以来、リウカン・トパビリン郡の郡役場が置かれていたが、1971 年にパンケップ県から当時のウジュンパンダン市 Kota Madya Ujung Pandang に移管合併されてからは、同島単独で、ひとつの行政村 Kelurahan を構成するようになった。このため、リウカン・トパビリン郡の新しい郡役所は、バラーンロンボ島に移管された。1971 年以後、バランロンボ島とバラーンロンボ島は、それぞれ異なる地方自治体の下、対照的な社会経済的展開を遂げることとなる。

II. 歴史の中のスプルモンデ諸島

1. 概要

18 世紀前半からこの地域を拠点として発展したムラユ商人やアラブ商人などのイスラーム商人は、当時、オランダ東インド会社が掌握していた香料交易に関わったほか、スプルモンデ諸島沿岸部に生

¹ 出所：パンケップ県役人が所有する未整理のデータ。

² バランロンボ島 Barrang Lompo とバラーンロンボ島 Balang Lompo は、本来、どちらも「バランロンボ」と表記すべきであるが、混乱を避けるために、微妙な発音の差異を表す表記とした。

活していたバジャウ人 Bajau や平野部から移住してきたブギス人 Bugis、マカッサル人 Makassar などの漁民を船子とし、交易船を操った。ナマコ・フカヒレ・ベッコウや燕巣・沈香・伽羅・白檀といった海産物・林産物交易を求めて、スプルモンデ諸島を出航した交易船は、ボルネオ島沿岸からジャワ島北岸、小スンダ列島東部、そして香料諸島以東で活躍した。

この経済活動の隆盛期には、中国から南洋交易の帆船がマカッサル海峡を南下して、華人商人たちはゴワ王国とタッロ王国の王に拝謁し、この地域での商業活動に従事するようになった。華人商人たちは、商船を繫留する立地条件から、マカッサルの街に面した東側の海岸が深く落ち込んだ良港を持つバランロンボ島を中心に、定住するようになった [濱元 2004 : 47-48]。バランロンボ島は、スプルモンデ諸島の主要な島の中にあつて、沖合い 13 キロメートルと最もマカッサルに近い場所に位置する。一方で、この距離のために、直接的な王国からの干渉をほとんど受けたくないような、微妙な政治社会的な立場を確保できたともいえる。やがては、このような距離感を最大限に活用しながら、名実とともに島嶼部の中心的存在として、経済と漁労活動における大躍進に向かうこととなった。

このような海域部にあつてのムラユ商人あるいは華人商人たちの圧倒的存在感は、バランロンボ島のみならず、その周囲のバランチャディ島、コディンガレン島などにも社会経済的な影響を及ぼすところとなる。18 世紀から 20 世紀初頭にかけて、スプルモンデ諸島南部域の 7 つの島に、華人商人やその末裔が多く定住するようになったのは、バランロンボ島に似た隆起サンゴ礁の地形が、天然の良港を有したこと、またマカッサルからの距離が近かったためである。現在のパンケップ郡に所属する島々が、マカッサルからの距離が 20-30 キロメートルであるのに対し、これらの 7 つの島のうちもっとも西方のランジュカン島とランカイ島を除く 5 つは、13-15 キロメートルの範囲に位置する。商業にも漁業にも適した立地は、この地域に多くの裕福な商人を引きつける根拠となり、かれらの下で船子になるために、スラウェシ本島やその沿岸部の漁村から、多くの人々が移住してきた。スプルモンデ諸島は、17 世紀以降、香料交易という世界史的な経済活動に平行するローカルな交易活動ではありながら、最終的には世界市場へとつながっていく、海産物や林産物などの交易をめぐる繁栄期を迎えた。

2. ムラユ商人

スプルモンデ諸島全域には、満潮時には海面に隠れてしまう砂地であるタカ taka が、多数、点在する。近隣の島民が、ヒジュラ (イスラーム) 暦サファル月に、親戚や近所同士が誘い合つてタカを訪れ、クルアーンからの字句を写し取った紙を海に流すマンディ・サファル Mandi Safar (サファル月の海水浴) をおこなう場でもあつた。木造の漁船に島民数十名が乗り込み、供え物として海に流すためのバナナの房や、モチ米で作った儀礼用菓子などを用意し、男性も女性も遠浅の砂地の海に浸かる。マンディ・サファルそのものは、南スラウェシ本土のイスラーム社会では、ほとんど知られていない行事である。この地域の島民たちは、島嶼部地域にのみ断片的に残された宗教儀礼であると認識しており、17 世紀後半にスプルモンデ諸島に定住するようになったとされるマラカ王国からのマレー商人やアラブ商人が持ち込んだ伝統であるとも伝えられてきた。

ムラユ人 (マレー商人) たちは、当時、マカッサルで栄華を築いていたゴワ王国やタッロ王国の庇

護を求め、マカッサルにおける交易活動をさらに活性化させるために、この地域の交易活動に積極的に関わった。後にゴワ王国とタッロ王国が管轄したマカッサル港初代港湾徴税人syahbandarとなったのは、ムラユ商人の子孫であるインチェ・アリ・アスドゥッラInce Ali Asdullahであった³。[KKIKM 1986:7]。ダト・パベアンDato Pa'bean（徴税長官）としての呼び名が、その本名よりも広く知られた。かれの墓所は現在もバランロンボ島、カンポン・ムラユKampung Melayu内の墓地にある。インチェ・アスドゥッラの祖父はビマ王国Kerajaan Bimaに逃れたムラユ商人ダト・インチェ・アブドゥラ・マンナン・アミルDatuk Ince Abudullah Mannan Amirであった。インチェ・マンナン・アミルは、ボネ湾に面したシンジャイ・プロプロ郷の貴族の娘アンディ・ファティマAndi Fatimahを妻に迎えた。その子でスプルモンデ諸島北部サブトン島Sabutungに海洋交易の拠点を築いたインチェ・アブドゥラ・ラフマンInce Abudullah Rahmanを父に、ゴワ王国の貴族の王女シッティ・ジャミラPutri Sitti Jamirahを母に生まれたのが、ダト・パベアンである。

ダト・パベアンは、ジョホール王国から1632年にマカッサルに移住したダト・パドゥカ・パジャ・マハラジャレラDatuk Paduka Paja' Maharajalelaの曾孫ラトナ・カシアンPutri Ratna Kasianを第一夫人に迎え、その間に生まれた4人の息子と3人の娘の婚姻によるブギス＝マカッサルの有力商人や貴族たちとの関係を利用して、18世紀前半に、バランロンボ島とサブトン島を二大拠点とするスプルモンデ諸島の隆盛期の幕を開いたのであった。かれは、バランロンボ島の周囲に親戚や係累のムラユ商人たちを住まわせ、かれらの経済活動のための便宜をはかった。[KKILM 1986:7-8、濱元 2004:46-47]。ムラユ商人たちは、やがては華人商人たちを島嶼部地域に迎え入れた。中国を經由して、東南アジア大陸部から運ばれてきた上質の絹糸、綿糸などの機織りの材料や織機、陶磁器は、一旦、スプルモンデ諸島に荷揚げされたのちに、東カリマンタン、ジャワ島北岸、そして香料諸島のある東部地域に向けて、ムラユ商人らによって運ばれていった。とくに華人商人が運んできた座機織機や絹糸や綿糸は、18世紀半ばごろに顕著になったマンダール地方からの女性たちの機織り技術を得ることによって、スプルモンデ諸島地域に独特の腰巻布（サロン sarong）の文様を生み出した。これが、交易や漁労活動の結果、他の地域の住人と結婚したり、その他の理由で他地域へ移住したりしたスプルモンデ諸島出身者と、故郷を結ぶ役割を果たした。移動した人と故郷とのつながりは、布の交易によって脈々と保ち続けられてきた。21世紀になってもなお、この地域のナマコ漁の船は、島の女性が機織った腰巻布を船に積み込んで、出航する。外の世界（地域）との確かなネットワークが構築されていることが、この地域に強固であるとはいえないまでも、海の地域としての独立意識をもたらした。この独立意識は、似たような状況を有する隣接する島嶼間での連帯意識を芽生えさせることとなった。陸地の社会とは良好な関係を維持しつつも、海の地域の共同体のようなものが生まれたのではなかっただろうか。

3. バランロンボ島

上記の腰巻布（サロン）のいわば生産拠点となったのが、バランロンボ島であった。ムラユ商人や

³ インチェは、マレー語で男性一般に付ける敬称Encikが変化したもの。スプルモンデ諸島およびマカッサル市内のムラユ人社会では、男女に区別なく、名前の最初にインチェが付加される。既婚女性には、オバあるいは母を意味するボンダBondaがインチェの代わりに使われることもある。

アラブ商人がモスクを島に建設し、イスラームを受け入れた南スラウェシの沿岸部地域から、マンダール、バジャウ、ブギスそしてマカッサルの人々が、島に移動してきた。サロンはやがて、現地の女性と結婚してムスリムとなった華人商人たち—チナ・マカッサル—らによって、その交易品としての商品価値を見出されることとなった。このような背景を下に、バランロンボ島は、スプルモンデ諸島の中では、圧倒的な経済力と突出した社会的ネットワークを基礎に、顕著な存在感を持つようになった。

マカッサルの交易港パオテレ港から一番近くにあるバランロンボ島には、ムラユ商人が多く住んだカンポン・ムラユの他、南洋交易でマカッサルと関わるようになった華人商人が多く住むカンポン・チナ *Kampung Cina* が開かれた。のちに、かれらの船子となり、ナマコや高瀬貝、ベッコウなどを潜水によって採集する技術に長けたバジャウ人もまた、島の西海岸部、現在のカンポン・バジャウ *Kampung Bajau* に定住するようになる。華人商人が本国から絹糸や上質の綿糸を運んできたことから、マンダール地方からも多くの織子が島に移住してきた。織子や機織りに資本を投下する住民は激減したが、現在にいたるまで、機織りは依然としてバランロンボ島の重要な交易品のひとつである。スプルモンデ諸島からジャワ北岸にかけて点在する寄港地の島々には、多くのバランロンボ人が遅くとも18世紀末には居住し、さまざまな民族的背景を持つ人々が、個別の商業的活動に特化しながらも、有機的に結びついてひとつの経済共同体を構成する空間として、バランロンボ島の存在が広く知られるところとなっていた。バランロンボ島から北へ約20キロメートルにあるサレモ島 (*Pulau Salemo*) やサブトン島 (*Pulau Sabutung*) には、マラカ王国から移住してきたマレー人が開いたプサントレン (イスラームの寄宿塾) があつたとされる。隣接する島同士の距離が木造の小舟で30分から60分という間隔で、スプルモンデ諸島はウジュンタナ郡からパンカジェネおよび島嶼部郡の沖合に横たわる。それぞれの島の民族構成や主要な生業活動のターゲットは異なる。漁業における漁獲、商業活動の目的地などの微妙な棲み分けは、島と島の社会経済的な関係を安定させる作用をもたらした。今日に至るまで、島嶼間には政治的な力関係は確認されていない。交易や漁労活動の側面からみれば、そこに多少の優劣関係が存在することは感じ取られる。しかしながら、基本的にはひとつの島は、その島固有の生活様式と生業活動を持っている。互いに相手の島のやり方を尊重しながら、独自性を保ちつつ、交易や漁労活動では他の島の住民がひとつの船に乗り込むことを排除しないなど、他者を受け入れる態度を取ってきた。

このような島嶼部における社会関係は、基本的には安定して持続してきた。カリマンタンからの高級林産物 (燕巣、沈香、ボルネオ鉄木など) で経済的な成功をおさめる島があつたり、それぞれの島の固有の背景による貧富の差は確かにあつたが、そのことが、この海域に社会経済的な力関係をもたらすことはなかったし、政治的な序列を与えることもなかった。

4. スプルモンデ諸島の政治的変遷

このような均衡状況に、変化がおとずれる契機となったのは、1971年のことである。スプルモンデ諸島のうち南端部に位置する7つの島が、パンケップ県から分離し、ウジュンパンダン市 (マカッサル市の当時の名称 ; *Kota Madya Ujung Pandang*) の管轄下におかれることとなった。パンケップ県

リウカン・トパピリン郡の郡都であったバランロンポ島は単独でクルラハン (kelurahan ; 町) を構成し、バランチャディ Barrang Caddi 島以下 4 島 (ランカイ島 Lnagkai、ランジュカン島 Lanjukan、ルムルム島 Lumu-Lumu、ボネンタンブン島 Bone Tambung そしてコディンガレン島 Kodinggareng) は、3 つのクルラハンを構成するようになった。

スプルモンデ諸島に政治的な区切りを与えられたことにより、この地域はいやおうなく、それぞれが属する地方行政とのかかわりを密接に持つようになった。インドネシア共和国の独立以来、地方行政とのかかわりは、それまで地域社会を安定させてきた伝統的な政治権力者ガッララン gallarang が国家の枠組みの外側に置かれことから、変化が始まったといえる。ガッラランは世襲制の伝統的な集落を支配する者としてスプルモンデ諸島の社会に位置づけられてきた。これが、郡からの任命により島の外部の人間が、政治的リーダーとしての役割を与えられるようになった。しかしながら、まだまだ伝統的リーダーが社会に与える影響はそれなりに強いものであり、世襲リーダーとはいえ、地域の人が信頼して選んだ人物であった。郡から任命された役人はそのことをよく理解しており、適度な距離感を持って地域政治に関わってきた。

ところが、スプルモンデ諸島南部地域がウジュンパンダ市に移管され、同北部地域がパンケップ県に残されたことを契機に、さまざまな状況が変化しはじめた。パンケップ県は、離島地域における貧困や低就学率、診療所やその他の役所などの環境を改善させる政策を、段階的にはあるが打ち出すようになった。ガッラランは依然として存在する一方で、郡の下に位置する村 desa の長もまた、住民の総意によって選出される。伝統的な政治体制と独立後の新しい政治体制が、スムーズに地域の中に取り込まれて来ていたといえる。これが、南部地域がウジュンパンダ市に移管されたことにより、この地域の 7 つの島は、それまでの自立的な政治への関わりを失ってしまうこととなった。郡役場は、市 Kota Madya に属する郡 Kecamatan の区 Kelurahan としての位置づけを、7 つの島に与えた。これにより、区長 Lurah は、郡役場に属する公務員から任命されるようになった。後述するように、どの島も厳しい生活環境を呈することから、島の生活に不慣れな部外者は、なかなかその社会の中に溶け込むことができないという背景がある。スプルモンデ諸島の北部と南部とは、徐々にではあるが、まったくことなる方向に進むようになったのである。

5. スプルモンデ諸島の後期近代—経済活動

20 世紀後半、1970 年代前半に、バランロンポ島では、他の島に先駆けて、いち早くプラスチックファイバー製で、エンジンを搭載したスピードボートが導入された。鮮魚をマカッサルに出荷するための搬送手段として使われるようになったことから、この地域が潜在的に獲得していた地の利や交易活動が、船のモーターゼーション時代とともに、またしても開花することとなった。その経済力は、かつてバランロンポ島やコディンガレン島に居住し、20 世紀半ば以降に、相次いでマカッサル市内へ拠点を移した華人商人たちとの社会的関係を梃子として、東南アジア市場を目指して、急速な成長を遂げた。

この好景気を目にした当時のマカッサル市は、市名をウジュンパンダと変更するのに伴い、スプルモンデ諸島南部域の 7 つの有人島を、パンケップ県から移管させることに成功する。ウジュンパン

ダン市の水産物出荷場に漁獲を卸すようになった島の漁民たちは、かつて島嶼部に居住していた華人商人やそのネットワークを頼りとして、華人ボスから漁具や漁船などの設備投資資金あるいは中長期間におよぶ比較的遠洋での操業のための資金を借り入れるようになった。中には、最終的には自前の漁船や交易船を所有するほどの利益を得た者もいた。華人商人あるいはムラユ商人たちと同格に並び立ち、大儲けする訳ではないが、経済的基盤を着実に積み上げることに、バランロンボ島、バランチャディ島そしてコディンガレン島が成功したのは、1990年代前半のことであった。1993年頃から、この穏やかな経済安定期に大きな変化が訪れることになる。

東南アジア沿岸部地域では、遅くとも1980年代末から1990年代初頭にかけて、スズキ目ハタ科のイカン・スヌ ikan sunu やイカン・クラブ ikan kerapu を集中的にねらう漁撈活動が空前の景気時代を迎えた。スプルモンデ諸島近海のサンゴ礁域に棲息するイカン・スヌやイカン・クラブは、1990年代前半には1キログラムの最高値が5-6万ルピア（1995年当時の価格で約2,500-3,000円相当）であった。1995年当時、高卒で公務員勤続10年の月給が約30万ルピアである。水深5-10メートルの海での素潜り漁がうまくいけば、一尾2-3キログラムのサカナを数匹捕まえるだけで公務員の月給が軽く手に入る。これらの高級魚は、インドネシア国内市場で消費される対象ではなかった。さまざまな薬品や処置によって仮死状態にされたまま、スヌやクラブは、シンガポール、マレーシア、香港、タイなどに空輸された。華人ネットワークに乗り、朝、島の畜養集魚所を出たサカナが、夕方にはインドネシアの近隣諸国の海鮮レストランで消費されるのである。取引はドル建てでおこなわれた。1997年10月ごろから、東南アジア諸国は、幅広い地域で通貨危機を経験した。この危機の最中、マカッサルは同年9月から10月にかけて、反華人暴動が勃発し、一時的に華人商人たちが、国内外へ一挙に避難するという出来事を経験する。このため、スヌやクラブを海外市場に輸出するためのシステムが一時的に華人から地元の有力な漁民などに託されることとなった。1998年5月に独裁的にインドネシア政治を掌握してきたスハルト大統領が失脚、退陣した。新大統領には南スラウェシ州に縁の深いB.J.ハビビ大統領が就任することとなり、南スラウェシの景気も、漸進的に回復に向かった。

この過程の中で、一時的に出荷が停滞したスヌ・クラブの輸出は、思いがけない好景気を迎えることとなる。通貨危機の結果、米ドルに対するインドネシア通貨ルピアは暴落した。1998年5月末日の為替相場では、1ドル9,000ルピア強にも達した。この一年前には約5分の1の2,000ルピア程度であった。スヌ・クラブの取引は、末端の漁民に対しても基本的にはドル建てでおこなわれた。この当時、一匹の高級クラスのスヌ（サラサハタ、ネズミハタなど）を捕まえることができれば、1週間の生活費を捻出できるほどであった。3匹ほどサカナを釣れば、合計が約100万ルピア（日本円で約1万円）の時代であり、スプルモンデ諸島付近のサンゴ礁域では、スヌ・クラブは無尽蔵に棲息するものと、考えられていた。木造削り抜きボートでの日帰り漁業から、中央に海水を循環させる生け簀を装置した母船に50隻もの小型ファイバー船を積載した大規模漁業まで、幅広い形態でのスヌ・クラブ漁がおこなわれた。余裕のある大規模漁民は銀行から融資を受け、小規模漁民は有力漁民から資金を融通してもらったり、頼母子講などからの借り入れによって、漁具や漁船を調達した。こういった借り入れは、数回、豊漁が続けば即座に弁済できるような景気でもあった。

いずれにしても、その数年後にはサンゴ礁域の魚類資源は激減し、度重なる魚毒漁や違法ダイナマ

イト漁の影響を激しく受け、この地域の生態環境は破壊寸前の状況に瀕することとなる。掠奪的漁業は急速に終息に向かい、2002年頃にはスヌヤクラブを専門的にねらう漁民は激減した。

このことにより、多くの漁民はスヌ・クラブ景気以前の、伝統的漁業であるナマコ漁や刺し網、巻き網漁業に回帰した。中には、漁業を辞めて、東カリマンタンやパプアなどへ出稼ぎに出るものもいた。景気時代には、バランロンボ島からは、毎年のように50人近い島民がメッカ巡礼を果たした。これと同じ時期、ジャワ島ジョグジャカルタ州グヌン・キドゥル県の村（人口3,000人弱）では、年間一人の巡礼者がいただけである⁴。圧倒的な景気時代の名残りは、遠隔の島嶼部域における不自然に思えるほど多数のメッカ巡礼者と、かれらの絢爛豪華な住まい、かれらを巡るさまざまな言説の中に今なお確認することができる。地方分権ということばがスプルモンデ諸島地域の住民の日常生活の中で聞こえるようになったのも、皮肉にも基本的に貧困なはずである漁村において、貧富の差の指標として散見されることとなった巡礼者の存在によるものであった。これだけの巡礼者がいるというのに、なぜ島には小学校しかないのか、なぜ保健所出張所Puskesmas Pembantuには医師どころか保健婦さえ常駐していないのか。好景気時代にマカッサル市に収めた税金は、一体どのように使われたのか。島嶼部の住人が、このような疑問を抱くようになったのである。

6. 巡礼から教育へ

経済上の影響は、人々の生活にさまざまな変化をもたらした。20世紀後半になって、ある程度の生活の豊かさを享受するようになり、マカッサル市内での生活場所を確保するようになった島民が増えた。その結果、離島における教育問題が、この地域の住民たちにとって、深刻な問題として認識されるようになった。豊かな可処分所得は、まずムスリムにとっての義務のひとつであるメッカ巡礼の実現のために投じられる。巡礼経験者の多くは、その宗教的な称号である「ハッジ」を獲得することにより、経済機会の拡大に際して、経済活動をおこなうことに際する社会的信用を得ることになり、これを最大限に利用するようになる。当初は、自宅の改築や漁船やハイテク漁具・船具の購入に財を投入してきたが、次第に、マカッサル市内に住宅を購入することで一種の投資をおこなうようになった。やがてはこの投資が、子どもに教育を与えることに向かうようになる。家族のうち、両親や未婚のキョウダイを島に残し、夫婦と子どもで街中に移動し、子どもが安定した初等教育や高等教育を受けられる環境を確保する世帯が増加してきた。たとえば、2000年以降の高等学校進学者は、バランロンボ島の場合、毎年13-15名である⁵。このうちの半数が、子どもの進学に合わせて、マカッサル市内に住宅を購入している。なかには複数の世帯が共同で、住宅を購入するケースもあった。巡礼を経験している両親のうち多くの男親は、漁船や交易船の船主であるため、出航に同行する場合もあれば、マカッサルに残る場合もある。教育を受けた子どもたちの多くは、男親が船主である場合は、そのまま家業に従事する傾向が強い。男親がその他の職業に従事している場合は、マカッサル市内のスーパーや会社などに就職するケースが多い。

このような一部の富裕層だけが許されるような教育環境の現状に対して、同じように税金を払いな

⁴ 1990年代末にグヌン・キドゥル県の村で調査に従事していた島上宗子氏との議論で得た情報による。

⁵ 男女の比率は、2000年以来一貫して、ほぼ同数。

からも離島に住んでいるからという理由で、それが社会教育的に、地域に還元されないことへの不満が次第にだされるようになってきた。聞き取り等の範囲では、明確に、地方分権ということと相関するような現象であると早急に判断することはできない。しかしながら、それまでのスプルモンデ諸島地域の住民の行動様式からは、想像し得なかったような発言、たとえば「税金を払っているのだから、小学校や保健所を整備しろと要求する権利はある」といった文言を聞くようになったのである。スラウェシ本土の政治状況に翻弄されながらも、陸との距離感を利用しつつ、海の地域の独立性を保持してきたスプルモンデ諸島が、おそらくは初めて、政治に関わる態度を示した発言である⁶。

III. 地方分権下のスプルモンデ諸島

1. 離島地域の教育問題

1971年に、パンケップから7つの島がウジュンパンダン市ウジュンタナ郡に移管された。これにより分断されたふたつの地域のその後の経験、学校教育環境から検討してみる。

移管以前にバランロンボ島には、島嶼部地域では唯一の中学校が開設されていた。1971年以降は、この中学校は、リウカン・トパピリン郡の役場がおかれたバランロンボ島 Balang Lompo に移設された。これにより、1971年以降、ウジュンタナ郡第28中学校が1993年にバランロンボ島に開校されるまで、この7つの島には小学校しかなかった。一方、バランロンボ島では、中学校の他、数年後には高等学校が開校された。2005年には、バランロンボ島に定時制高等学校が開校された。この定時制高校は、主としてバランロンボ島以西のさらに遠隔の島からの生徒を対象として、木曜日から土曜日までの午後の時間帯に開講されている。定時制高校の教員は、同じ校舎を午前中に使う全日制高等学校の教員が兼任する。

コディンガレン島では、2004年に中学校が開校されたが、島外出身の教員が離島暮らしになじまず、一年後に休校となった。ウジュンタナ郡の島嶼部のうち、もっとも面積の広い同島は、マカッサルから木造の貨客船で約1時間20分の距離にある。高床式家屋が密集する島の中央部には、華人墓地跡が残され、漢字の墓碑銘が刻まれた亀甲墓が数基、残されている。家屋の建設のために主要な樹木は伐採され、日中の気温は35度前後にもなり、涼しい風も通らない。昼間の電気供給はなく、日没から深夜零時までの時間のみ、島の中央部に設置されたインドネシア電力供給公社 PLN の大型発電機から通電される。生活用水用の水道が全島に配管されているが、隆起サンゴ礁の土地を掘り下げ、汲み上げる地下水の塩分濃度は濃い。石鹸やシャンプーは泡立ちにくく、水浴びをしても気持ちの悪さが残る。

こういった環境に適応できなかったのは、島外出身の学校教員だけには限らなかった。保健所の保健婦はもとより、郡役場が任命した村長 Pak Lurah でさえ、村役場に出勤しないのが通例であった。事実、バランロンボ島では、少なくとも1990年以来、わずか半年だけ任務した島内出身の村長を除く4人の村長は、島が用意した村長公舎に居住するのを拒んだ。子どもの教育環境が劣悪であるから、

⁶2004年12月のバランロンボ島の住民集会での住民の発言。

あるいは妻がいやがるからといった理由を、島に居住しないことの理由として公然と島民に伝える状況に対して、住民たちはそれなりの態度でもって、村長を冷静に批判してきた。通常は村長の妻が任命される婦人組織 PKK の活動も、離島部においてはまったくおこなわれてこなかった。スハルト政権期においてさえ、8月17日の独立記念式典に、村長が出席しないのが通例であった。式典での首長演説は、毎年、中学校卒の村役場書記が代読してきたのである。ウジュンタナ郡の政治状況については、客観的に見ても陸地からの関心が寄せられていないことが明瞭である。またこのような状況に対して島民も、余計な政治状況に関わりを持つ必要がないものとして、都合のよいように解釈をしていた。インドネシアの他の地域とはおそらくひどく異なるような、政治と村の関係であったと考えられよう。

このような背景の中、パンケップ県では、1990年代初頭から、島嶼部に居住する住民の子女に対する奨学金プログラムを開始した。この奨学金は、パンケップ県内の公立高等学校の授業料ならびに下宿代などの生活費を支援するものである。成績優秀者の場合は、希望すれば、マカッサル市内の教員養成大学へ進学することもできた。その場合も、基本的には授業料および生活費を県が援助するという内容である。このプログラムは、島嶼部地域における厳しい生活環境と、そこでの生活に適応することの困難さによる教員・保健婦・看護婦・その他の公務員などの離職率や休職率の高さを憂慮した県が、島嶼部出身者を優先的に公務員として雇用することにより、地域社会を支援しようとする目的を持つものである。

2. 沿岸住民に対する経済効率促進計画

しかし、このような状況に関して、他ならぬウジュンタナ郡島嶼部地域の島民自身が、疑問を呈するようになったのは、地方分権ということばがようやくスプルモンデ諸島一帯にも浸透しはじめた2003年のことである。

海洋水産省は、「沿岸住民に対する経済効率計画 Program Pemberdayaan Ekonomi Masyarakat Pesisir」を公示した。インドネシア全域の沿岸漁村における住民の経済機会への参加を活性化させるために、少額融資をおこなうものである。ひとりないしは数人だけが乗り組むような釣り船を使う漁民が漁具や船具を買うため、女性が小規模商売をはじめめるための資本金として、あるいはすでに従事している商業活動への資本あるいは設備投資として、簡単な書類審査を経て、最大5百万ルピア（約6万円）までの融資を受けることができる制度である。融資を受けた人は、その翌月から決められた額を PEMP に返済する。

PEMP計画は、海洋水産省の州政府およびその下部機関により設置される沿岸域経済開発マイクロ金融組合 (Koperasi Lembaga Ekonomi Pengembangan Pesisir Mikro Mitra Mina /LEPP-M3) によって、デサおよびクルラハンなどの村落に対して説明会や普及活動がおこなわれる。ウジュンタナ郡の場合は、Swamitra Mina Phinisi Nusantara Makassar (ピニシ・ヌサンタラ) という名の事務所がこれを担当している。この事務所は、所長以下、全員がウジュンタナ郡島嶼部地域の出身者である。現在、30歳代前半から40歳代後半のスタッフは、それぞれの出身の島に小学校しかなかった時代に島に育ち、比較的裕福でかつ教育への関心の高い家族を持つために、中学校からはマカッサル市内

の親戚の家に居候したりして、マカッサル市内やジャカルタなどで、大学における高等教育を受けたという共通の背景をもつ。それぞれが社会活動ないしは自分たちの故郷の経済的発展に関心を持っていたが、ほぼ他人同士の関係であった。この他人同士が、島嶼部地域に対する経済効率促進計画の下に顔を合わせることとなり、スプルモンデ諸島地域の今後についての自主的な勉強会が開かれるようになった。

IDT（大統領決定による貧困対策）などの政府主導の経済支援プログラムとはことなり、融資を受ける島民は、その経済状況や融資の返済プログラムなどを、十全にこのスタッフと相談してから初めて、融資申し込みの書類を受け取ることができる。恣意的な選出という嫌疑を受けないためにも、融資案件募集の公示も、島内の公共掲示板を通して、透明性を高くしておこなわれた。

この一連の融資の普及案内や説明会の過程で、「ピニシ・ヌサンタラ」の若いスタッフたちとウジュンタナ郡島嶼部地域の住民たちは、度重なる意見交換や島嶼部における社会経済生活の向上のための話し合いの場を持った。インドネシアの他の地域とは異なり、村長の社会的地位が相対的に低く、地域としての結束力が島の外に対してそれほど重要な意味を持たない状況が続いてきた中にあり、島の出身者ではあるが、長らく違う環境に生活してきた若い人々からの影響が、直接に、伝わる機会となったようであった。「ピニシ・ヌサンタラ」のスタッフたちは、不定期ではあるが、それぞれ数名ずつが一緒に、担当の出身の島々を訪問しており、地域間の情報交換の媒介役としても活動している。表敬訪問として年に一回、郡長が訪れるか訪れないかという離島の住民にとっては、顔を合わせて直接に対話ができるスタッフとの交流は、ひじょうに意義のあるものであることだろう。このような交流の中から、ウジュンタナ郡島嶼部地域が、同郡から独立し、独自の新しい郡を設立し、自分たちが従事する漁撈活動が、地域社会の社会的発展に結びついていることを実感したいと考えるに至ったのである。

IV. 結語

2007年2月現在、スプルモンデ諸島ウジュンタナ郡島嶼部地域における新郡設立の動向は、若干の停滞気味にある。その理由は、2005年以来、この地域の漁撈活動全体が直面している自然資源の枯渇に加えて、同年10月におこなわれた原油価格値上げが、零細漁民のみならず、大型の漁船の出漁傾向にブレーキをかけることとなったからである。一回あたりの燃料コストは、生活を逼迫するどころか、出漁すればするほどに、漁民の経済状況を悪化させるようになった。この状況に対して、「ピニシ・ヌサンタラ」は、燃料購入のために融資を受けるのではなく、代替的生業活動に従事するための融資申し込みの説明もすることがあるという。PEMP計画の本来の趣旨には沿わないが、おそらくは緊急事態対応ということであろう。このような状況下にあっては、新しい郡を作るというエネルギーも、なかなかモチベーションを持続させることは困難である。

それにもかかわらず、この地域の全体の雰囲気は、わずかではあるが、変わりつつあるように見える。政治が島にやってくるのを待つのではなく、自分たちから政治に近づこうという兆しのようなものが感じられるようになったのではないか。「村長は、島の出身者から選んだほうがよい」「島から出

ていくのではなく、島の暮らしを改善していきたい」。このようなことばが、スプルモンデ諸島の漁村から聞こえるようになった。そのことがすなわち、離島部における地方分権の浸透の指標であるとは、思わない。しかしながら、スハルト政権末期の1995年から約12年の間、この地域の人々の暮らしに深く関わりながら地域研究に従事してきた筆者は、海の地域共同体のようなものがいつかたちとしてまとまるのではないかという予感を覚える。

2006年5月、バランチャディ島に、初めての、漁民出身の村長が誕生した。もちろん、島の生まれ育ちである。このニュースは、ウジュンタナ郡島嶼部地域に即座に伝えられた。これがひとつのはじまりであるのかどうか、早計はできない。それでも、ようやく、島に政治がやってきたのではないかと考える。

文 献

Kerukunan Keluarga Indonesia Keturunan Melayu (KKIKM) Ujung Pandang “Sejarah Keturunan Indonesia Melayu,” Ujung Pandang, 1986.

Koperasi LEPP-M3 Phinisi Nusantara “Profil: Koperasi LEPP-M3 Phinisi Nusantara,” Kota Makassar, 2006.

濱元聡子「島嶼間移動をめぐる社会史的な地域研究—〈しま〉模様の海—」京都大学大学院人間・環境学研究科博士学位論文（課程博士）